

私の幼稚園

水島 さゆり

——泥棒の巻——

時雄「水島さん、泥棒の話してよ。」

園長「はいよ、いくらでもして上げませう。」

時雄「三つでも四つでも？」

園長「勿論、さ始めますよ。」

園長の頭の中へは、幼時の思ひ出——郷里の村
での泥棒の話しが、次々と浮んで来る。

頬かぶりに冷水

村の酒屋には、今日の賣上金が澤山、錢箱の中
に入れてあります。村中で澤山のお金のあるのは
酒屋だけ、あとの家は皆お百姓ですから、お金は
ほんのぼつちりしかありません。泥棒は酒屋の錢
箱を盗み出さうと思つて、月の無い眞暗な晩に、

こつそり酒屋の裏口へやつて來ました。

村中の人が一人残らず、ぐつすり眠つて居て、
酒屋の裏口へ泥棒の來た事を少しも知りませんで
した。お寺の白犬も、役場のワンワンもまるで知
らずに居りました。

酒屋の裏口の戸は、中からしつかり鑿金がか
けてありましたから、いくら明けようとしても明
きません。泥棒は仕方がないから、裏口の敷居の
下の土を掘り始めました。やつともぐり込める程
の穴が掘れたので、手拭で頬被をして、家の内側へ
先づ頭を突込みました。其の拍子に、ザーアツと
ばかり頬被の頭が冷水を浴びてしまひました。吃
驚仰天、泥棒は忽ち頭を穴から引抜いて、後をも

見ずに逃げて行きました。

物音に驚いて、酒屋の家中の人々が起きて見ると、お勝手で下女が寝衣のまゝで、からの手桶を提げて、たまらなさうに笑ひこけて居りました。

婆さん刃物を持つて來な

お爺さんとお婆さんが仲好く暮して居ました。或晩其のお家へ泥棒が這入らうとして、先づ入口のそばの壁に、握り拳の這入る位の穴をあけました。其の穴から手を入れて、入口の戸の繋金をはづさうと思つたのでせう、そつと手を入れたと思ふと、其の手を中からしつかりとつかまへた者があります。

泥棒は眞青になつて、ふる／＼震ひ出しました。すると家の中で、

「婆さん刃物を持つて來な。」

と叫びました。さあ大變、手首を切られてしまふ事になりました。泥棒はしく／＼泣きました。

切られたと思つた時、手首が穴から押し出されて來ました。しかも掌の中には、お金の包がはいつて居りました。

泥だらけの泥棒

風の激しい眞夜中に、よその米倉から米俵を一俵、また一俵と擔ぎ出してゐるのは泥棒でした。

五俵の米を車に積んで、エンチャラツと引出しました。風がひどいので、松の木が高い音をたててうなつてゐたり、雨戸ががた／＼鳴つたりして、車のさしる音などは少しも聞えませんでした。

暗い道をエンチャラ、エンチャラ引いて行くうちに、急な坂へさしかかりました。丁度其の時、激しい風が恐しい勢で吹きつけたので、米俵の車も泥棒も、あつと言ふ間にすべり落ちて、坂の下の泥沼の中へ、ひつくり返しに落ちてしまひました。泥棒はやつとの事で這上つて來ましたが、顔も體も泥だらけの泥棒になつてしまひました。

「コラッ」

或ち家へ泥棒が這入りました。皆ぐつすり寢込んでゐましたが、お祖父さんだけはお床の中で眼を明けてゐました。泥棒は其のお祖父さんのお部屋へ這入りました。

着物だの帯だの襟卷だの、時計も財布も盗めるだけ盗んで、しまひにはお祖父さんがぬいて置いた足袋までさらつて、大風呂敷の中へほうり込みました。お祖父さんはくすんとも言はずに、泥棒のする事を眺めて居りました。泥棒は大きな風呂敷包を拵へあげました。それでもお祖父さんは何とも言はずに見て居りました。

泥棒がヤツコラセと、大風呂敷の包を脊負はうとした時、

「コラッ」

と一聲天井が抜ける程の大聲で、お爺さんがどなりました。泥棒は吃驚仰天、包をそこへ放り出し

たまゝ、兩戸を蹴破つて雲を霞と逃げて行つてしまひました。

× × ×

今度は園長が泥棒に見舞はれた話です。此の家へ本當に泥棒が這入りました。留守を見込んで、庭木戸からこつそり這入り込んで來たのですから、例のあき巢ねらひと言ふやつです。夕方園長が歸宅して見ると、きちんと締めてあつた筈の机の抽出がどれもこれもひき出したたまゝになつてゐます。

やられたかと、急いで箆笥の中をしらべて見ると、どの抽出もごつた返しになつてをります。仔細に點檢して見た所、幸な事には一品も無くなつて居りません。やれ嬉しやと一息ついて、今度は針箱の底をさぐると、ぼろ切に包んで用心して置いた紙幣數枚が、そつくり出て來ました。泥棒はお金を目あてに搜したらしく想像されますが、隨

分間拔な泥棒だと笑つてやりたくありません。

蠟燭の光で庭の地面を丁寧に観ると、霜柱で浮き上つた土の上に、ゴム靴の大きな足跡がついて居りました。何も盗まれなかつたのは、仕合ですが家中ひつかき廻されたかと思ふとあまりいゝ氣持は致しません。まだ其の邊をうろついて居るやうな氣もします。

今夜は十分戸締に注意をして寝ようと、何處も彼處もしつかり締めて、さて目覺しをかけようとする、これはしたり目覺時計の姿が見えません。はて確に此處にあつた筈なのに、見えないのは不思議と、念のため廣くもあらぬ家の中を捜しましたが、遂に見つかりませんでした。てつきり盗まれたのです。

何も盗まれなかつたと喜んだのはあやまりで、毎朝起して貰はねばならぬ目覺時計を持つて行かれてしまひましたのでした。

高價な品ではありませんが、デン／＼太鼓の形をした時計を、四本の柱がかゝへて、お屋根をかぶつて立つてゐるのでした。純金ではありませんが、全體が金色に光つてゐました。

惜しくはあるが、忙しくもあり、あまり大した物でもないので警察へ出頭するのを見合せて、もよりの署長さん宛に一筆書きました。時計の形と價格も書添へて置いたのです。

二三日たつと、ひよつこりち巡りさんが訪ねて来て、盗難の模様を委しく聞きとり、當分日中も夜分も氣を附けて上げませうと言つて下さいました。園長はち巡りさんが急に有難くなりました。

一箇月もたつた頃、別な警察署から、盗難品が出たから取りに来るやうにと云ふ通知が來ました。新しく目覺時計を買つて、不自由は感じなかつたし、もう遠に泥棒事件など忘れてゐたので笑止千萬な心持で件の署へ出頭しました。

型の如く代書屋で何くれと書いて貰つて、導かれるまゝに刑事部屋へ這入つて行くと、一刑事が、もえぎの風呂敷を持出し、盗難品をそれ／＼に渡して居りました。着物や帯など受取つた一人の男は、腰をかゝめながら、

「はい其の風呂敷も手前どものもので御座いますて——。」

と言つて居りました。やがて刑事が私に向つて、「これですか。」

と差出したのを見ると、まがふ方なき園長の目覺時計でした。

「はい、左様で御座います。どうも有難う御座いました。」

うや／＼しく受取ると、

「此の目覺を盗んだのは、貴金屬専門の奴でしてね、市内から市外へかけて百五六十軒も荒したんですよ。」

と言ふ刑事の話、聞いて何とも言へぬをかしさか込み上げて來ました。

ただ金屬と言つても、園長の家には、針と鋏と、

火箸と、庖丁位しかありません。中で少し金目の物は目覺時計、それも只の金屬で、貴金屬とは言はれません。金色に眼が眩んで、純金とても思つたのか、何にしても、其の目覺が再び歸つて來た事は慮外の喜びで、如何にもをかしい事でありました。

時雄「水島さん、今のは面白くないよ。」

園長「あいよ、も一度やり直し、今度は面白過ぎて、

お臍が宿がへをしますよ。」

時雄「いいね、面白いねえ。」

園長「泥棒がねえ、水島さんの留守に、そーと此の部屋障子をあけてね、こんな顔をして覗いたのよ。」

時雄「そしたらら。」

園長「そしたらね、目覺時計が、コッチ、コッチと言つたものだから、泥棒がこつちの方へ、のそり／＼と這入つて來たのさ。」

時雄「アッハハハハハハ……。」

(をばり)